

2019年8月11日

福音書からのメッセージ

小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。

(ルカによる福音書 12 章 32 節)

今日の福音書を読むと、このような命令が心に残ります。「目を覚ましていなさい」。わたしはこの言葉が苦手でした。肉体的に目を覚ましておきなさいということではないことは、分かっていました。しかし「いつも神さまに心を向ける」ことが、とても辛い時期がありました。思いや言葉で人を傷つけ、自分と違う考えの人と関わることを嫌い、自分勝手に生きていく。教会から離れた生活をしたときに、窮屈さから解放されたような思いすら持ちました。

しかし、今日の箇所を改めて読んだときに、イエス様はただ「目を覚ましていなさい」とだけ命じられているのではないことに気づかされます。

イエス様は、「主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕(しもべ)たちは幸いだ」と言われます。そしてその理由を、このように言われるのです。「はっきり言うておくと、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる」と。

ずっと読み飛ばしそうになりそうですが、ここに書かれていることは「あり得ない」ことです。主人の帰りを待っているのは僕たちです。僕とは当時で言うと、奴隷にあたる人たちです。奴隷ですから、主人が遠くから帰ってきたら、どんな時間であろうとも食卓を用意するのは奴隷の役目です。しかしイエス様のたとえに出てくる主人はそうしませんでした。主人自らが腰に帯を締め、僕たちを食事の席に着かせます。そしてあろうことか、そばで給仕をしてく下さるのです。



イエス様はわたしたちに、「目を覚ましていなさい」と言われます。それはいつ自分が帰ってきたときでも、ちゃんともてなせという意味ではありません。イエス様が来たときに、わたしたちを喜び

の食卓に招くから、それまで起きていなさいねというのが、イエス様の願いなのです。

「はい、待っています」。しかしそんな威勢のいい答えとは裏腹に、わたしたちはすぐに心乱れ、他のことに関心を向け、自分のことを第一に考え、まさに眠ってしまうような、そんな時間を過ごすかもしれません。

イエス様が来られたとき、急いで目をこすり、顔を洗って、「眠ってなどいません！」と力強く答えたとしても、イエス様はわたしたちのことをすべてご存じです。そのときにイエス様は、「ちゃんと起きてなかったじゃないか」とわたしたちを追い出すでしょうか。わたしは思います。イエス様はそんなことしないと。

それどころか、わたしたちにイエス様は食卓を準備される。これがイエス様のもてなしです。この約束を知っているから、わたしたちは日々喜びをもって、待ち続けることができるのではないのでしょうか。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>